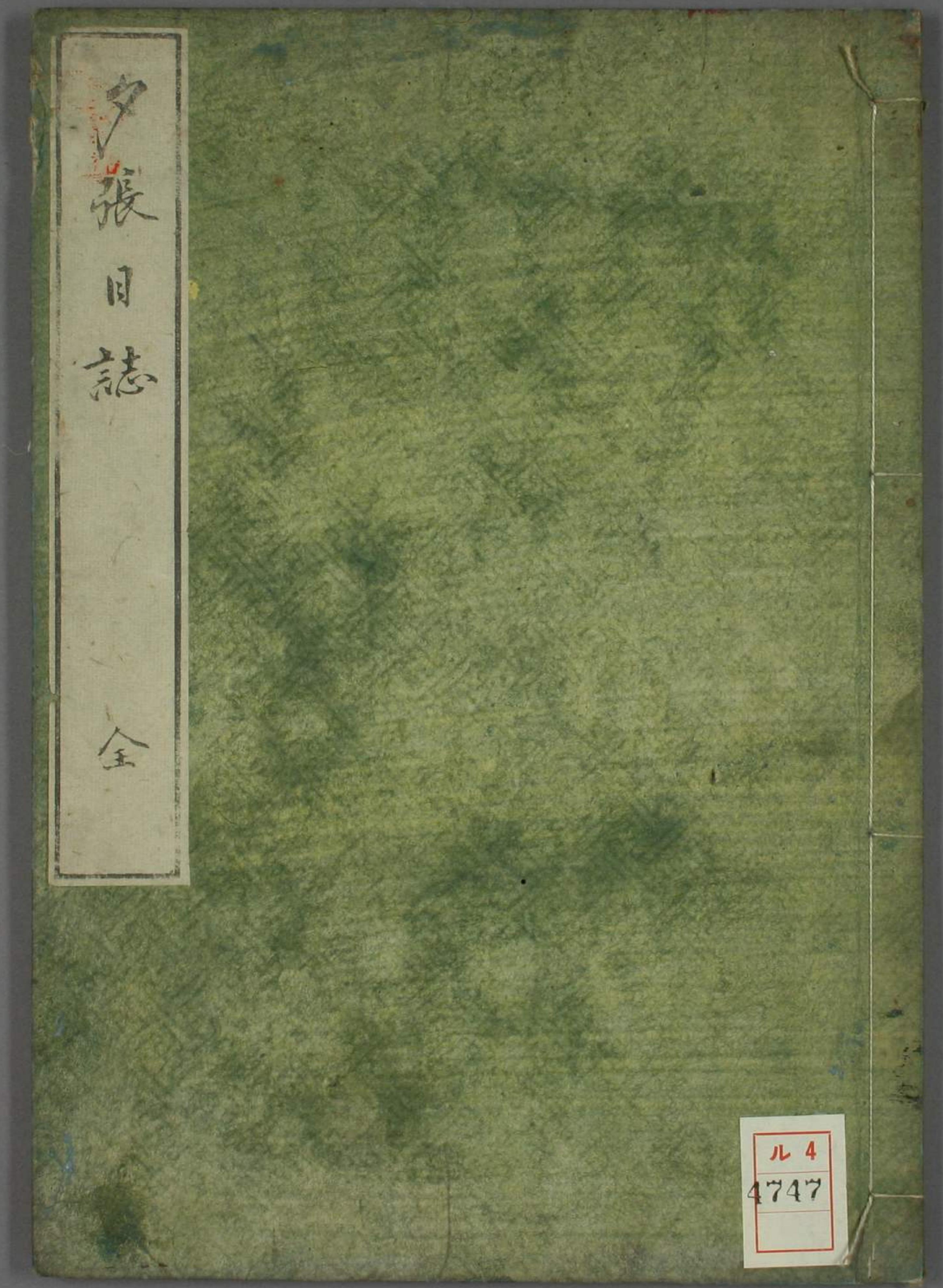


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

JAPAN



地東山
西曲里
城城東
調東
山行川

慷慨
自由
快乐
未来

卷之三

正義堂印

A square red seal impression in seal script, featuring four characters in a stylized, archaic font. The characters appear to be '印信' (Seal/Stamp) or a similar phrase.

一ユーフバリ去箱舎百余里 トクビタ
上サツボロ 下サツボロ
上カバタ 下カバタ シュマツブ
上ユーバリ 下ユーバリ レノ早ナイホウ
左の渓アマツシキ ト西南をユーブツサルヌ境
バイ ソラチの水添イヌヌ 梅良は ポルムイ ビ
夷地守アマツシキ の大島アマツシキ あ夏四アマツシキ 年
其川筋アマツシキ レコツ川アマツシキ 千
歳アマツシキ 木アマツシキ の後アマツシキ つ新道アマツシキ 人立アマツシキ の為アマツシキ 木境域アマツシキ を実検アマツシキ ユーフバリ 徒アマツシキ 二千
走アマツシキ 夫アマツシキ レコツ湖アマツシキ 上アマツシキ 木アマツシキ ラサクマナイアマツシキ 海濱タルマイアマツシキ 濱アマツシキ
是アマツシキ 新道アマツシキ 五アマツシキ の為アマツシキ 垂糸岳アマツシキ の東西アマツシキ 量アマツシキ 走アマツシキ レコツ徒
一卷アマツシキ 走アマツシキ 共アマツシキ 地圖等アマツシキ を画アマツシキ 亟館齋アマツシキ 納アマツシキ の今アマツシキ 事アマツシキ を

少長子志

合せ要を擧て一巻とも以て是迄極矣人手は已く年號をも辨へず
考の極よほへ本末も然らずとすまゝ天地の開闢人倫の起元を主傳
てあらゆる事也

皇國太古の年振は地ニ残るを害^一記して又張り表す所の事
されば此一卷こそ國工かひ新乃の閑^二才子也て大紙を用ひまし
て志士君子は喜びあつたを聞せんのとくに原稿墨を至誠^三讀む
業迄え未申中をあ下今新居敷^四僑人吉源弘^五之

丁巳張日德

伊勢
松浦竹四郎
著

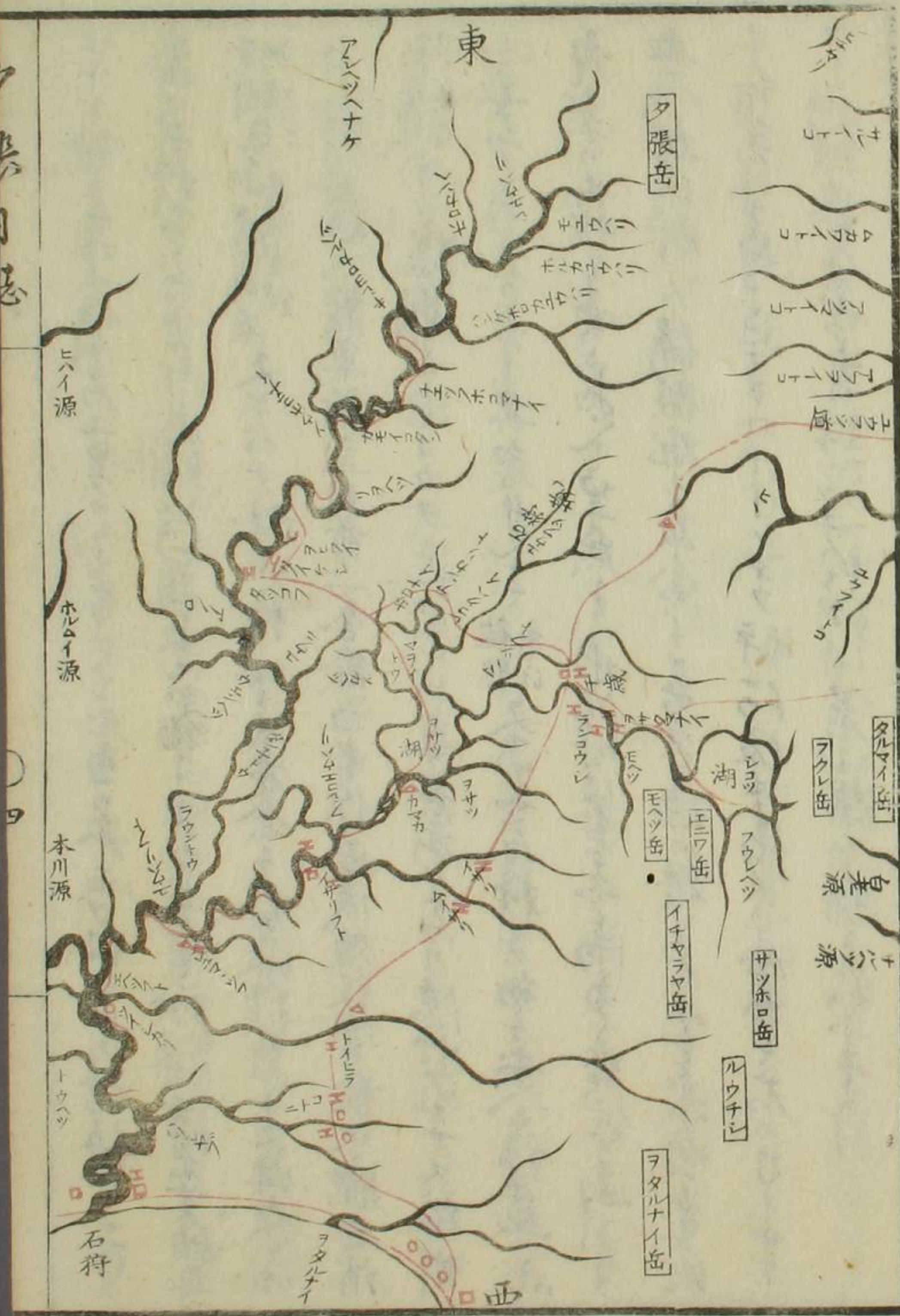
不持の不小辱は歸らぬ多くの手人を率やて支配人林をア字無モ其方ノ
桂痘を御多柳此地第一の災厄ともとて痘疹を人間う焉モ滅損する
事あらずして甚野村五郎左衛門は是を懐かし多く之聲に申す
船島の櫻ともいふ水く此方を施さるや高火丸を摩ニシムナリ
今よりはいかこの神國人疏を以テ御心向ひて是を有
此中タハチの子人多在居をシリカニキウアヒイトヤエタルコロアフニテクル四度ニ同リセシヤ越後守
八日戦事公長五川氏儀酒一樽入を頼ム右高津不持湯乃木是四
月廿七日

九月重音四塞發舟一エヘツブト巾サモモエベツト兔脣のやニツモ八分
處に休て立つ事く坐を芳ひ人あす全弱有リテはヨリ燈是入リモ兩界
出度會計船も天日と齋山からや一聲先船去て嶼島熱て裏時モ黒れり
椿象モ色黒利嘴敵手信と嘴利カツ志リハカモイウカ族チャノイヘ右
チレ子ノタフモ一ゆ縫船一生涯モ一上モ沿う芝生花菖蒲等モ樹と柳
茶あこむすて桺柔楊かつ利桐等小楠櫻紫葡萄の糸縫船モカモ
イウライウレ急ハニケソウバ左ヘニケソウバ左ホンカヤニカルシ左カヤニカルシ左トフ
レホヲマナイト太レエブニベツ太マワレノカツトコンキチエトイトレユニナイ太此道
鶴多一ヘタス左レコツ二段左ユウハリ此度又ユーバリは水を向くゆり
左ウリ又上リ余ラウントウ周圍ノ苔多く斐窓菴菜莢菜通

孟廟東多ク校木アリ獨多の節ヒモ舟通ひ船此モニニア府ニモタ
子トウ中生丁是モ芦荻多ク危沼根木モ主産裏新穂モ支ヅク字トウ
沿長丁余是モ芦荻多ク危沼根木モ主産裏新穂モ支ヅク字トウ 開治
川見モ上モ危沼之水深モ底を故モアモニヘシヤイウレナイ太バンケヌブカモヘ
シケヌフカ地アユタフ回クツタラ川左古村寔モ芳ひ人至るモ意欲波ミモ五ナシ新
有トナリトナリモ一射行是モノヤサロウシモアチヤニベ左ウエヘツ川
背骨の支流モ小字あ源ホルムイと向背して少一の山有
寔を立モクツタラ川此モ地傳言モ水也モ放モ烟波也是モ
上エフカリトモ云姓モ上モ下スカリトモ全人間モ辰巳未モ此時葉内
の考義言モ解モスナリ故モ上下事モアモト言傳モ金井本モタツコラ舟を
コラ送モ多シモビラケヨマ太テー子ナイ太トトイビラ平ホニビラ平ホロビラ
記す

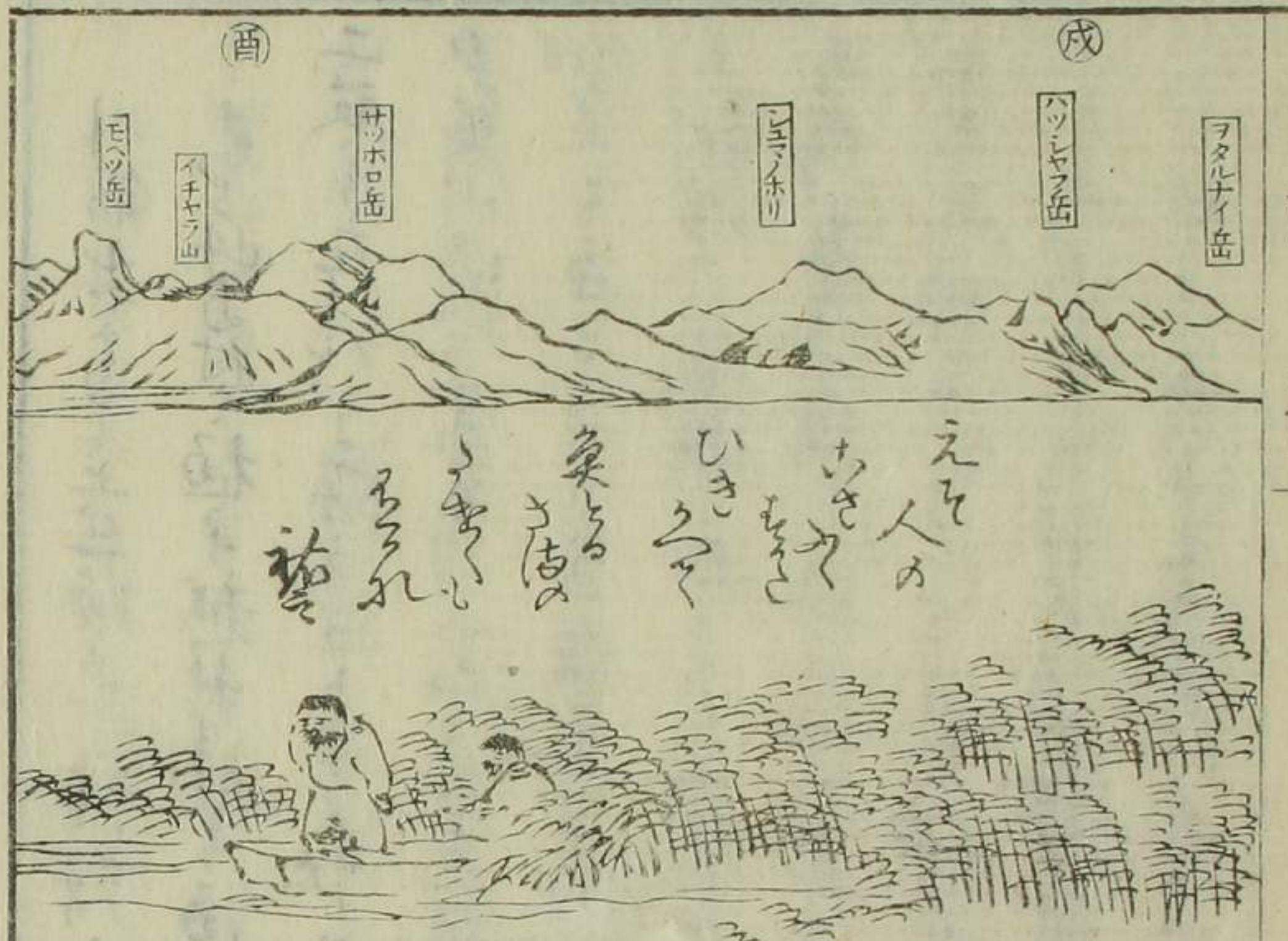
キム山の下筋平野とユフニ川の方

背が二の支流少々多く源はユウニホリと云山ちツカベツと向背を此毛下板山有川を遡急流其越てアロ左の力ヤナガニキ地人あぬ
川筋の支流少々ある源はホルムイの源と并ユハリの小口アモリ
ヨリワリマナニキテタシコロはモマライチ越赤く宿りお^キ上モ松原を
お渡ヘタヌニ本モ入りテレユマツフ五萬小休ふばは石^シ傍よキ人一
新ケン有裏も伴ホトム^ムあ辱也本ミ^ミ鑿^クキナチヤウレ太ホロヒリキウレコヲ
奉名シユマラマフ^ム岩有^ム義^ミ源を察總長^{シラス}をあ辱小石モ
標^シ有^ムもあ辱也本ミ鑿^クキナチヤウレ太ホロヒリキウレコヲ
レウシ^ムヒニナ^ム太上^ム沼^モ周^ム寛^ムロコン^ム針^シ立^ム奥^ム此沼^モ上ロコモ

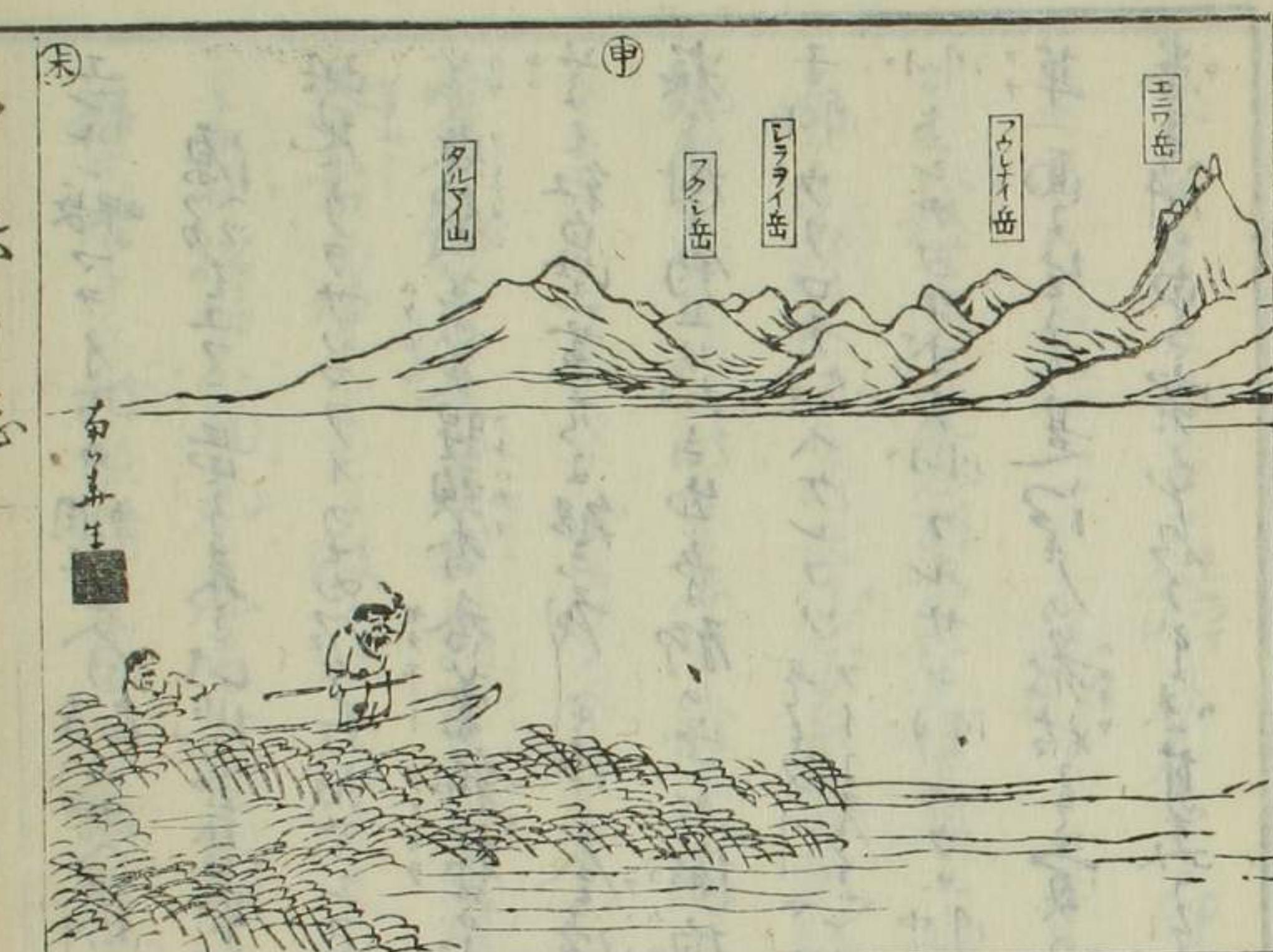


ツナイ川カニイツと云ひ此國名ユウフツモ有口コンニキ魚の名モツはツツの刺候トツラトモ
義く是松シマツあそトケヨコ刺魚山國ヤマニ起この物よコのまを腐シミテ錢茶シマチ津至シマツ賴
至鯛魚禹錫食經カニカマ又ギバチハチ水鱗水スルニ鱗食スルニそれを水行及シマツ小穴麻疹シマツ疾シマツ疾
モニ頭黃頬八鬚魚。綠豆同煎一合餘。白者作羹成頰服。管散水腫自消
除スル醫林シムリ集要シムヨウ嗟哉シカツニコウヲ近江シマツアカサ筑前シマツハチラリ瀬州シマツアカサス播州
ミヌ女シマツ魚有色少異シマツ生シマツ鑑錄シマツ又出シマツ魚有様シマツ之シマツ魚の色
聲シマツ水の土性シマツ無シマツ也シマツと旱歲シマツ水シマツ時シマツ色無シマツ雨無シマツ水シマツ無シマツ也シマツ
老シマツ人シマツ松シマツは肺シマツ人シマツ捕猴桃シマツを取シマツ命シマツ人シマツ之シマツ是シマツ魚シマツ食シマツも
主シマツ切芳シマツ人シマツ之シマツ也シマツコトイシマツタフ平シマツ河シマツ流シマツもシマツ屈曲シマツ之シマツ刀シマツ人シマツ
フトシマツ内シマツ書シマツ番屋シマツ居シマツ有シマツユウマツシマツ人シマツ大野シマツ井シマツ翁シマツ子シマツ學シマツ之シマツ欲シマツ之シマツ榮シマツ也シマツ

川筋シマツ上二郎シマツ左伊サシマツ人家シマツ石桔シマツ人シマツ或シマツ人シマツ源シマツ家シマツ後シマツ岳シマツ也シマツ
來シマツ此シマツ有シマツ村シマツ桶半越シマツ新シマツ道シマツ也シマツ桺森栗シマツ加シマツ也シマツ
二股シマツ左シマツソシマツレコトシマツナシマツ太シマツソウヘッシマツ左シマツ川シマツ中シマツ背シマツ
夕シマツ張川シマツ不シマツ意シマツ來シマツ由シマツ今シマツ是シマツ危沿シマツ行シマツ舟シマツ魚シマツ利シマツヒトウシマツ太シマツロ
口シマツ裏シマツ夜シマツ入シマツ海シマツ雜水絕シマツ落聲シマツ葦原シマツ中シマツ此方シマツ彼方シマツ數深シマツ川
ら水シマツ涉シマツ舟シマツ族シマツ拾シマツ之シマツ巴シマツ日シマツ魚シマツ激シマツ水シマツ之シマツ擇シマツ之シマツ足シマツ也シマツ又
お般シマツ數尾シマツ捕シマツ海シマツサシマツ七里シマツ水上シマツ此魚シマツ人シマツ言シマツ之シマツ又
あよ麻シマツ群居シマツ之シマツ力シマツ大シマツ之シマツ到シマツ一本シマツ人シマツ飲水シマツ有シマツ不シマツ宿シマツ不シマツ不シマツ
喚シマツ漁收シマツ舟シマツ斜シマツ漏漫シマツ法渺シマツ極目シマツ漁深シマツ西シマツ顧シマツ是シマツ群シマツ後庭シマツサシマツ口シマツの
島シマツ隱シマツ之シマツ之シマツ矣シマツ是シマツ風度シマツ放シマツ之シマツ放シマツ之シマツ然シマツ之シマツ之シマツ一時シマツ也シマツ



宿あさくといひこよ旅宿せん
川をす公飲水も睡らるゆかり
弘此う葉園樹餘を閑をよ羽が秋田
城外有河其源湧注於山谷故其水
大都五六寸較比目大同唯鬚尾小異
味亦似比目而美土人呼曰鷹羽比目
名くは是かう此魚エヘットより本川
筋を一奥を入へてゆれ太役け刀よ
のを産ともかくと



十日往半山に登をちうちの昔秋のるえ程
の歩き難きをもの主我手も攀ず數度
カリシバブト川出やサツトウ沼
沼周三里八余原イチヤラのあら
小さな村す橋平通アリ
南シヨクニシユクバイ字は寅彦入をて
マテイ沼周四百八十石を引ひ向ち小
舟を拵て船首ヨクノボルを挽き矣を以ひ出
老翁の隣家の三兄弟も皆もんと惠子
ありマニアガリト(周二)上よウエノタ(サ)タン子

エンルン岬マナイトウ 国ノヨヘ左カツカベツ川を至冷水平 崩モヨアリ
源ツカエフニ島リ未シ地宝齋火、烟有、麻有、荒モ也
此地トヲサツマライのめ波打越シコツ宗御山モを傍シ、頭も筋東ト、芒青
茅殿鶴菖蒲蔓腥頭香香蕪稀絆小連翹簾香草龍膽蔓蕊曉殊ヨ釣船
茅モ紅紫黄モ解角モ中モ全未定方賣娘老未育モ写ガリ不寛ニ
根毛樹上けぬき出立脚のき於槲柏木の中モトホロナイ小レフントシ
子川ウリロチ川ヘケレコツ是ミヌ川マ此不岐之サユウバリノ内テナヨケホツ
小ホンナヨケボチ川フルサン小エウニ中道中華錦風毛アヤヌチ
草一面モ生アリ是江戸の花桔梗、實の生アリ、又アリ、レ地毛アリ無
嚙子許の向実もアリ、其美モ葡萄の如ク、土人言毛アリ、千葉と

古事記としてカタムサラ五章の芦原を押引りて頭を擧れば良方ノ南とすにて
ハチヤンベツ兵ユフホルムイ岳アノロ岳ユフヲヒトイ岳内ソラチ岳内山勢連亘鳥
を越え遙ニ垂志引岳是時年三十ニユフアリ役モユフアリ役教肩擎天井
南葉別岳拔子山沙河岳元駒馬列ヒミ地蒙めの禍山襟菊の方ニ走る
號ひ立ん力ナリけを麻免帽也朱子を散セシムヤエタルコロ一頭の熱を耐
えりてニタツヘツ川ヘルウヘツ小コトニタツコフヒラルキトヤムラワガナコトラン人之多
宿モ傍ヌ眉室栗稗解粟小豆蘿葡等草向胡凡南凡豆アヒメ又傍
番薯芋柱ナリ豆門飯を炊くは湯入秀モトナシキ
五針松煙石楠毛豆モトナシキ初山家モハ此地才一博識トテ故事モトナシ
辨^{レツ}毛豆ト相貌頗盛らず綠蠶黄蝶胸掩テトナシ數回ナ半之歲

卷之三

七

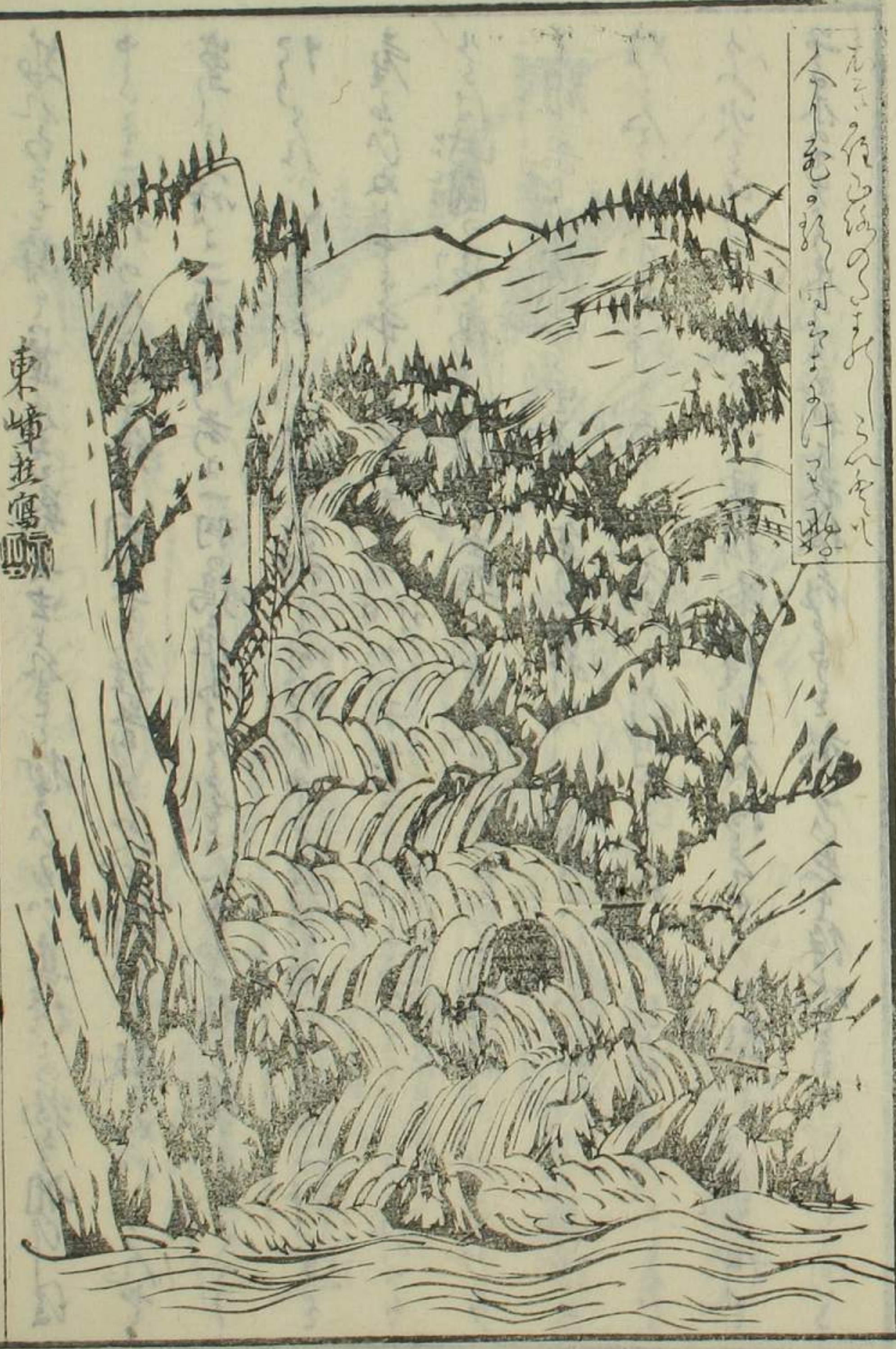
萬六十九歳とて御年より人至歳をあまること無く知りと云ひそれを
賓慶の考る所也我生を行ひ已、歳をかすり爲る。山園はめの算數も存
在内地とは思ひてゐる。教はさうりけられど支那の故に支平と曰の
吉凶の割出ても多くはけり。土用波岸社入梅室の入多ひ及至半夜即
ち月の大小室の舟の盈虧草木の葉枯らす。消方虫の鳥島の鷺ノ孤飛の聲
乃歎の先よ失ひてまが年より年より刻も一日二日の遲速もあれど三日

下枝縣青和幣白和幣相與致其祈禱焉す、萬葉集三天地之神乞禱と
乃又叩頭ノハシ乃美ハ祈也禱謝之義又云奴加豆久額衝也倭名鈔叩頭
虫和名沼加豆木無之周礼鄭註頓首如今叩頭之類首
叩地也とも又えりハフラフとも呼べり莫れに立て云れ大の
通稱

性好を失ひて少佐の如き人口の減りと隨て風体姿形も變り其の情を
つゝ金城は松の波岸と向うより八月二日吉津と云ふ里にてそのやうに
は國後ノ餘り子房の戦没者等を也

花鳥は楊柳舟日暮土の木生神代ヤリシツナカガラシ

彦子能鶴野子を飼ふ主鷄の籠前エナホミタニヤサシニシキモヒ古
事記本ニシテ物ノ所シ府中海原の中淳伊也有主鷄多シカクモトシ
ニカトアリ酒井の地に凝焉根並木ノ島根月日を重ひなく堅まり又
名勝一枝の計ありテノ麥ノ木ノ下ニシテノ御生堂上ニ年一天子も之を
詣て一枝の神廟五軒の寺を祭降りてからうさを海より投入して水
聲と聲の音が黄ばむて以爲根の隈と謂ふ時て金銀隣玉器初



東峰並寫

萬物を離て草木も歎虫も争ひ其様の物す御のほ
ちま御のほと縁て國上を經度する神を御也可也
萬物は二神の御前より一羽の鶴を來り多き事也
乃れに南極と名す二神主財のゆゑに五色の神達を
産むひぬと申す日ケレキツノ日クシ子チユツフノ
多は國の病禱津浦崎を除くかんとヘレキユツモ雌岳クシ子チユツ
ミ雄岳クシ子モ里をより昇天のみを渴むれし爲根の
路古今の後方半跡の岳あり其の神達或は火を生れ或は風
火を生れ神を栗桜奈の種を荷持てるを教へ土の神
萬木の下の木の皮を剥て衣被毛多を教へ水の神を金



呂山



さよまうらわくやまうづ
さよまあくべくかく

ニ

神名はもとより御事ありて體を廢絶ましら更に綱ミモリ利焼ミモリ神様と風ミモリ激ミモリにて生業と産むる神事ミモリ故ミモリて存ミモリして燒ミモリ事ミモリ是ミモリを
古くより上古之世未有文字貴賤老少口ミモリ相傳前言往行存而不忘書
契以来不好談古浮華競興還嗤ミモリ曰老遺序ミモリ古語拾ミモリのもの以爲之是ミモリ神代ミモリ傳
の有りうるミモリ一至ミモリは舊也ミモリは後ミモリハユカリミモリと云信助ミモリもあくミモリは舊也ミモリ有ミモリく
之ミモリアリトモミモリ其ミモリも御里ミモリ神代ミモリ之ミモリ也ミモリ

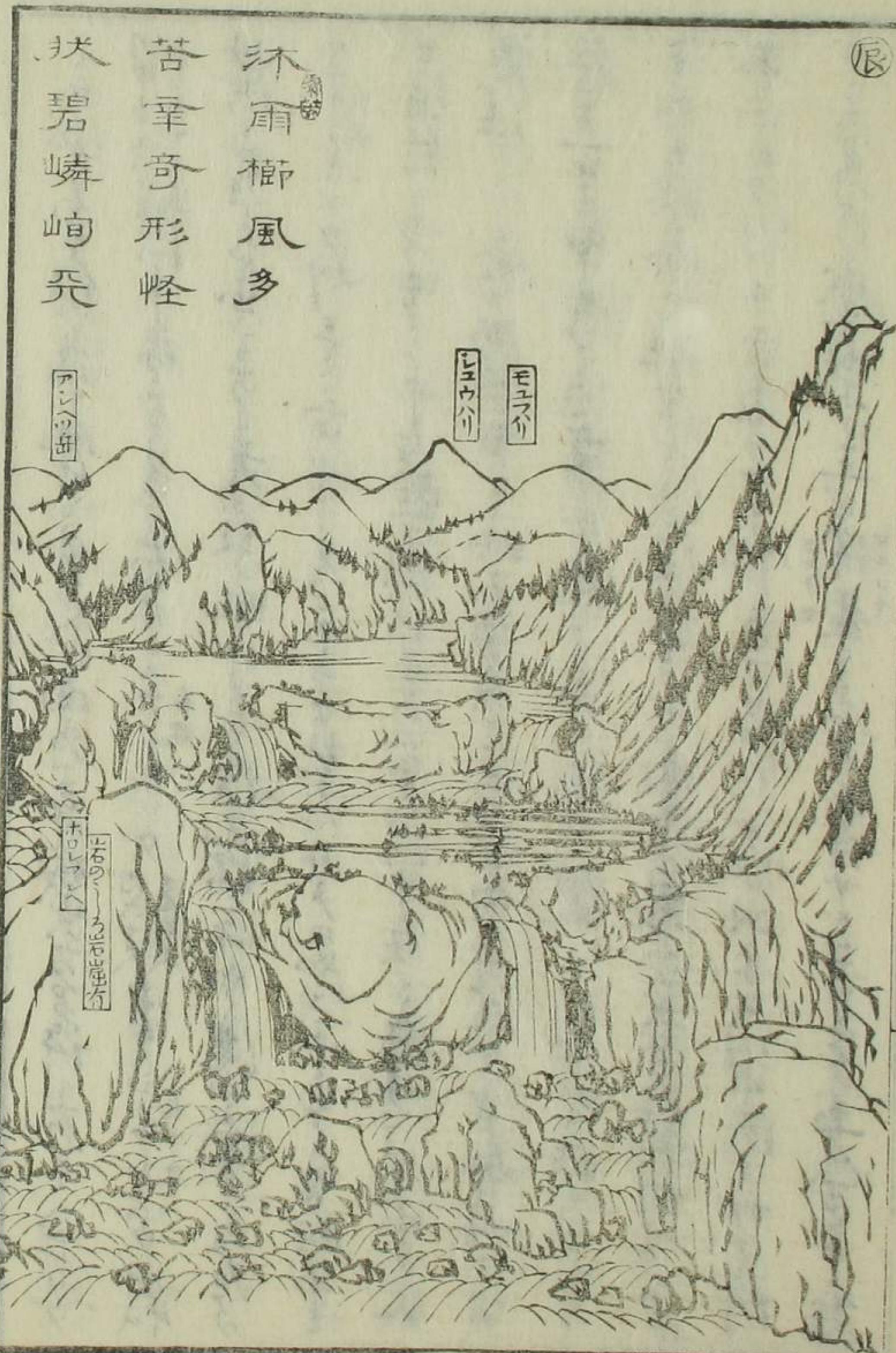
土日櫛ミツメツコトコトのキミツメツテミツメツ猛艤ミツメツコトコトよ余ミツメツを運ミツメツビラ星ミツメツ忙ミツメツ屏障ミツメツや水底ミツメツを穿ミツメツと聲
確ミツメツ色ミツメツ空ミツメツありて寔ミツメツ了ミツメツ烟ミツメツ是ミツメツ舟ミツメツもミツメツゆすてミツメツ檣ミツメツモミツメツアビブイミツメツ太ミツメツ身ミツメツ
ヲミツメツカレミツメツトナミツメツあつて寔ミツメツ了ミツメツ烟ミツメツ是ミツメツ舟ミツメツもミツメツゆすてミツメツ檣ミツメツモミツメツアビブイミツメツ太ミツメツ身ミツメツ
ラミツメツコトミツメツリヤミツメツあつて寔ミツメツ了ミツメツ烟ミツメツ是ミツメツ舟ミツメツもミツメツゆすてミツメツ檣ミツメツモミツメツアビブイミツメツ太ミツメツ身ミツメツ
穴ミツメツの跡ミツメツ人ミツメツあらハシゲタラミツメツ左ベニゲタラミツメツカフブンミツメツ太ミツメツ神橋ミツメツ大ミツメツ此ミツメツ中ミツメツ余方

手ミツメツ出ミツメツ身ミツメツ彼ミツメツ近ミツメツ庭中ミツメツの花石ミツメツかく山石ミツメツひ連ミツメツ昔ミツメツ神ミツメツの作ミツメツり
竹ミツメツ竹ミツメツ神橋ミツメツ身ミツメツ手ミツメツナエミツメツ左ミツメツ川中ミツメツカモイチセミツメツ大穴ミツメツと云大岩ミツメツ有ミツメツ上ミツメツ
家棟ミツメツケミツメツフルミツメツ山ミツメツ高ミツメツ九ミツメツ丈ミツメツ十ミツメツ丈ミツメツ上ミツメツマツクツナイミツメツ川ミツメツト云橋ミツメツ中ミツメツ下ミツメツ
左ミツメツエカレナツワツカ左ミツメツ尾ミツメツ川ミツメツ高ミツメツ九ミツメツ丈ミツメツ十ミツメツ丈ミツメツ上ミツメツマツクツナイミツメツ川ミツメツト云橋ミツメツ中ミツメツ下ミツメツ
走ミツメツ走ミツメツ川ミツメツ度ミツメツ一回ミツメツ走ミツメツ連ミツメツ小房ミツメツ渡ミツメツ底ミツメツ半ミツメツ足ミツメツとゆくミツメツ見
難ミツメツ越ミツメツ高ミツメツ平ミツメツ太ミツメツ高ミツメツ九ミツメツ丈ミツメツ十ミツメツ丈ミツメツ上ミツメツマツクツナイミツメツ川ミツメツト云橋ミツメツ中ミツメツ下ミツメツ
主ミツメツも廣ミツメツがミツメツ二年ミツメツ全體ミツメツ來ミツメツ矣ミツメツ實ミツメツ天子ミツメツの御觀ミツメツは小川中ミツメツも高ミツメツ二丈ミツメツで
裁ミツメツ激ミツメツ小ミツメツと身ミツメツと實ミツメツ小ミツメツ原ミツメツ上ミツメツクラヘツミツメツ右ミツメツ川中ミツメツの川ミツメツも高ミツメツ二丈ミツメツで
主ミツメツも明ミツメツ激ミツメツ一朝ミツメツと實ミツメツ小ミツメツ原ミツメツ上ミツメツクラヘツミツメツ右ミツメツ川中ミツメツの川ミツメツも高ミツメツ二丈ミツメツで
是ミツメツ方ミツメツも主ミツメツて源ミツメツ小ミツメツ原ミツメツ上ミツメツ一ミツメツの湖ミツメツも高ミツメツ二丈ミツメツで

ホロレユエタイ 左星 上を神カモイコタ
ホロレユエマス レユホロトモ云小高キホリ眺キモミ
雲桂名の猿アマガニと同を齧セリシモヤレハ一の巻又更志のホモ坡曼衍竹作壁檜
モキモトキモヨシモ此モ幻ミ小高キホリ窮テア高キホモ城度難を修ル者ムホキ
頗ムヨソウホコマカマ掌一際の櫻布ニ腰ヒダホホシテシムアヨ大風ム怜也筆の如ク又サ
上ミナホンソウ 小ニ一際の嵐山峰アラシヤマ數十際ニ成ニ惜也向盤ムツ狼孔ヤクノキモシキモ用
テホロフレベ大サモ五支條の鳥帽トリハチのぬき紫モモシロ又羊絆ヒツジハタケ又紫洞モモシロ又洞守マサニラ洞守マサニラ神
蜜ミツらとモ子ひ級エナラを納メテ拵アサシモ主上又ホンレフレベ大サマサトモキモ此モの紫
尊ミツタケ菊葉キクハの黄蓮カツラギヤヒキヤウ尾松余桂テラマツの黒附生シラタケヒモニ又左カホンソウホコマカマ高タカシヒモニ又ヨ
若モシモ根ルの上アシモ十石ヒカルキシルハバニゲソウバニゲソウ高タカシ麻マ五石ヒカルヒモニ又ヨ
主上又ホロレユマカモ中ミタモシモ序風シモウフウの如キモシモ紫モモシロ此モ序シモヘンケソウヘンケソウホコマフカマフ高タカシ五石ヒカル

と云流石也を仰ひ是を眺ゆる亦可。山南界より平磯堂より許上れをヘニケソウ
門中筋五十九方筋も三筋より左方太の方レユムシテキソウ 内六支人 中モシノマンソウ 中止
高ミナリヌ。右瀧 有此文 中モシノマニソウ 中止
此筋ある筋も三筋より右方より筋を波々吹く。後尾筋を波々拂山堂をぬた
ハルキテキソウ 中止 三口より下の玉筋はサクアのやまと穴あく有セ
左瀧 ハラカニヤ
も鰐筋も上右筋も右筋と枕元奥斗の筋。中筋く底深く水色如
藍濃く。怪しき筋也と思ひ此筋不思議也。三四筋がて左筋を右筋の時より
余り一ロ筋を左筋と實も観る多々思ひ此筋もシユラハリ サモユラハリ
主外主源の筋を眺ゆるも右筋一ロ筋を右筋の上を越剝離す。
不思議ありナチエツホラツナイ。左 然てラソウレ太此より川巾側サ筋
ノモニテ山南界より一ツの寧廬をもつて是はサルムカワをより上へ
マカルコヤ

卯



卯

鶴を守る所はあつたのであるが、金を貰ひて一宿したてマエタルコロ
も様子を聞きあつた。とて是の後、神がうるさいと云ふ猛熊、暴熊、忽
潛伏、時有鸞鳳來翱翔と記す。至る年を望年戌年、序ムカワユウのキリ
カツ村にてトシカウ小名を有り、此程驚きけられ過ちりと臥す。
種の御の御は我、ユフハリの事と稱されを多幸と我、小名されとく
考究りてかくすむ文字カシビには星は神の產業、やまとを如く其事に
思ひとて大抵の種の中の珍りを物たりと不羨儀りとぞれと
ナニ日南界とす。幹樹陰森とて喰きよどむ。ハシケクリキ太ヘンケクリキ
太も身を噛み噛み、あり悪氣の樹木成り故、下葉あくで是れと
寧存よキヨロカルベツ左中と立ち此山地を極めあるきふく構あ

は入道モシエハリモ原綱舟モ立並モ高山の山ノアソコソラチの刀ヨ
列ニ垂モモ源ノ瓦室也モ是夷地分ニ有ル山モ巔モ五株
松匍匐ノ谷モ石楠華一面モ生リトモ四時モ絶ムナシコトシラハ
空きの附山頂上を觀ムト其他ノがモトニ往昔ミサシ美濃國の僧圓
空此岳より上人モ此山モ仰ケテはよすゆと神カミ小美濃國の村口を
唱ス諸一軀の佛像と體モホロフレベの岩洞イワヤマ納ムニ仰リ
日ミ衣席傍イハタガタに張リ主佛像と御厨ヨウク圓舟のレコツヌ列リ者又モ像も今
の年歲カニの年歲カニ達ナキナリと云仍て圓舟主佛年歲カニ小堂を築ケ是成
成焉ヨリ而モ室又は帳テント設小角行基弘法大師大師ハシマ錫スズ金也
靈山リョウサン也哉是の年歲カニ正月ナリ

飛彈國志 姓氏或ハ何國ノ產何レノ宗泓云フヲ知ラス疑ラクハ是台密ノ徒ナルカ何レノ年本王ニ來テ深山ニ居ケン凡延寶ノ頃山中ノ民始テ見タリ鉈一柄ヲ携ヘ常ニ佛像ヲ造リ則其地ニ一枚メ捨又仍テ空カ來由ヲ尋問フニ敢テ答ヘス我山岳三居テ多年仏像ヲ作り其地神ヲ供養スト餘事フ云ハス尤衣食求ルナシ適食物ヲ与フル人アリト云ヘ庄費ヲ食ヲ物ハ請ス生ニテ食ヲ可フハ請也中畧空カ書画有各花押甲是也貞享ノ末或山寺ノ僧ニ空語ツア云ク今世ノ氣運ヲ見ルニ當城高既ニ廢スルノ時近シ不祥ノ地ニ居ルカラスト云リ則此國ヲ去ルト見エテ是ヨリ後見タル人ナシト也高山ノ城ハ元祿ノ始滅却ニ及ヘリ又東奥南部或ハ蝦夷ノ地ニ僧圓空作ト云モノ多シ倭漢三才圖會卷六陸奥南部燒山不時有燒故名之開基慈覺大師作半休地藏長五尺許其他小佛而人取去今僅存近頃有僧圓空者修補千体云改除カタハシムナリ正月時人傳モ出世化有ル佛といふ仏像ハシマ也

十六日南岸ミナミアシ計不^ト出マックナニの湖の下シ宿モ夜宿モ無

十五日タイケシユゆ^トニ康カニ足骨ヒヅケを牽セハ幸^ト銚^{タチ}盤^{ハシマ}盛^{タチ}也モ是を喰^{タチ}等
主骨ヒヅケを破^ル中^ニ一條の肉を取^ルて食^{タチ}味^{タチ}甘^{タチ}也^ト余^{タチ}骨^{ヒヅケ}を取^ル等
於^ト未^ト食^{タチ}の爲^ト備^ルモ夜^シタツコフ^ト宿^{タチ}孟蘭盆^{ハシマ}れモ土^ト木^ト墓^{ハシマ}而^ト飯^{タチ}取

源氏物語

卷之三

三

か供、御心斗の彼をもともと
草深き墓塚をもとへらを

乃も我アシテ神をもとへまき

主官婢舟ア白門ユウ二日空シヘツ日

ニテ船一乃ゆきそく大廟日の事

中金持越の移開ミ申の勞慰まつ

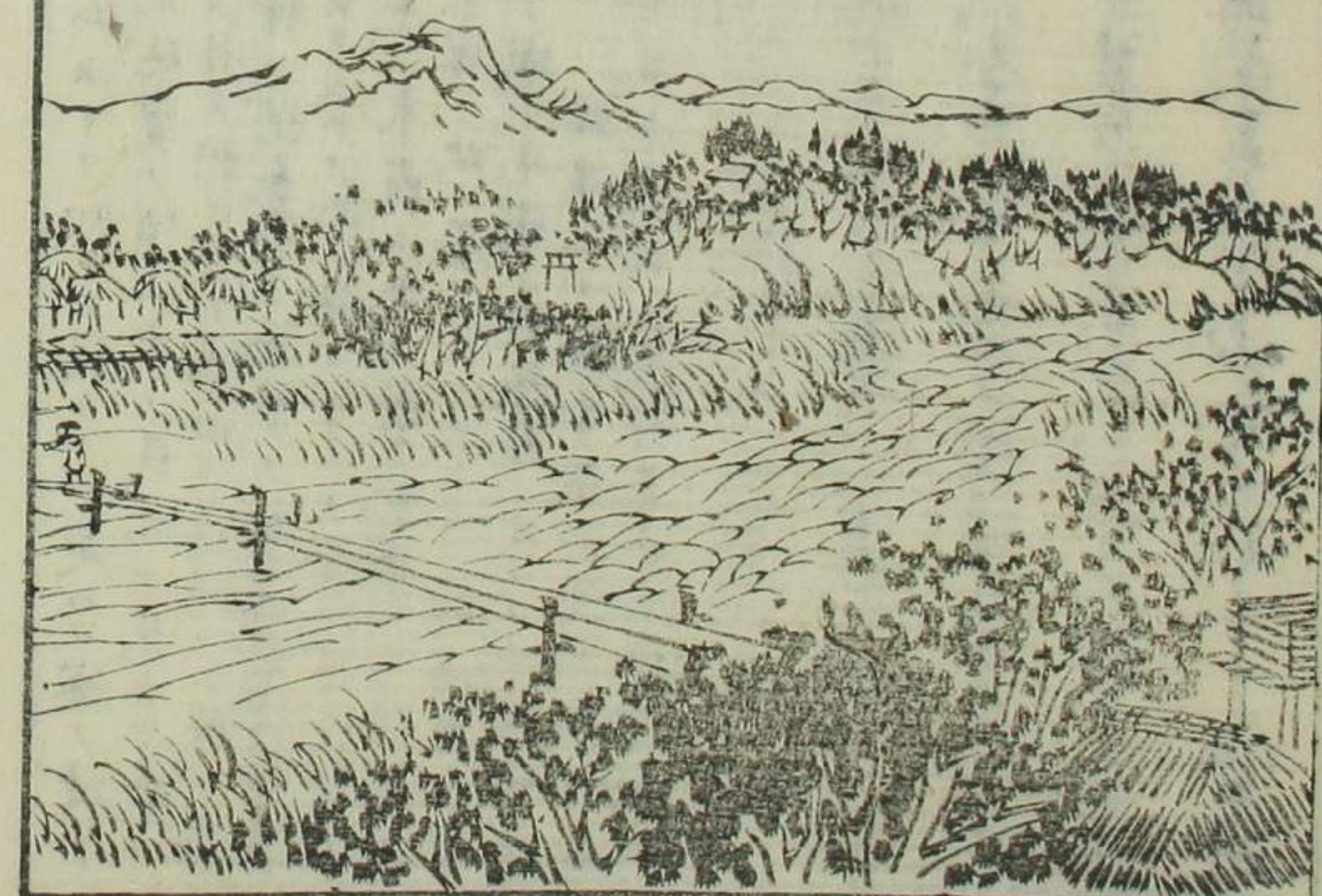
天あめうらの神の計コヨミを纏

主馬よなきつゝあん

十七日發先きヤムワツカ平洋上より處

宿を五時どもあす車を出立

岳



サツマライの沼よ照ひて主馳せinden方

御曉近くられを草原よ焉至るにて

宿は自當と我覺を

坐まうやをかぬ日新の極

が吾よりひきを思ふ

十八日舟を二度三歳三月金走まつて

道を陸運ア沼よ出あく写

金走を走まつての出の移我舟

ひつよれくよばまく

此を萬向と暖かす烟室裏やくえきまつ

四



川の番

五

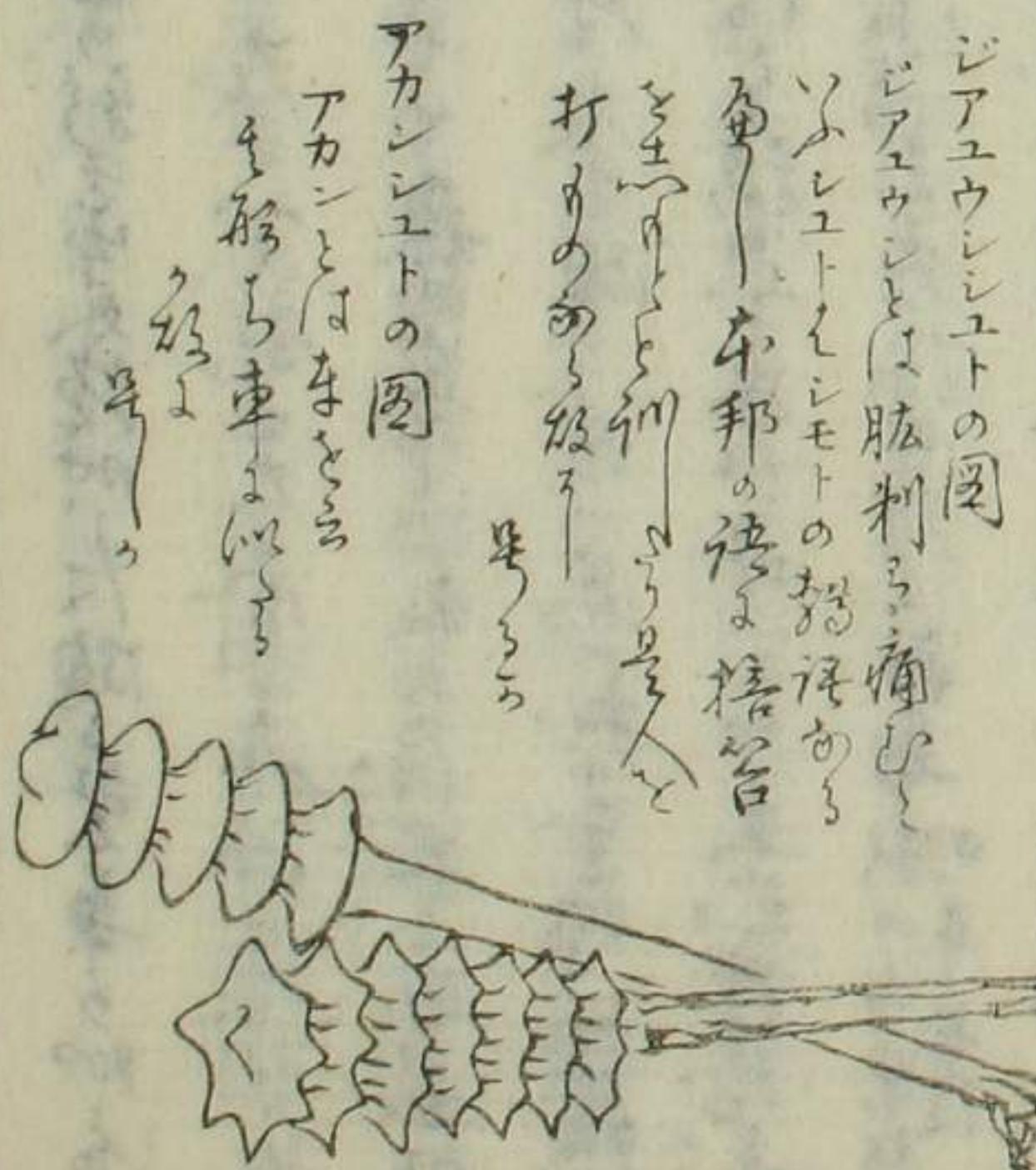
四月一日

清江雨錄



由布漫和
圓室鉗作
金身二尺許

千歳會下レコトトキと申す者不宜シテ
新ハタケあきをりて千歳門ミサカノマと
改ハタケりふ。休ハタケひえ記メモリノ著ハタケと考へ
達ハタケれあつあよ川カワ中ナカサ万斗マツド板橋ハタケを繁
多ハタケ丸ハタケ舟ボウをあめ縁ハタケ足ハタケは石橋シブ通ハタケひの
舟ハタケ上アベ半ハーフ牛ウシ人ヒト金カネ十五フイティあ序ハタケよ車カーブ達刀
他ハタケ異ハタケ麻殻ハタケめて五ハタケ酒カク肴ハタケ烟ハタケ也ハタケ
半ハタケ水ハタケ一ハタケ燈ハタケ舟ハタケ波ハタケ火ハタケ此ハタケ文化度
とハタケ終ハタケ漁場ハタケ山ハタケ脣ハタケ東ハタケユフヅハタケ所
道ハタケ送ハタケ寔ハタケの者ハタケ馬ハタケ牛ハタケ車ハタケヒホユカ
リハタケ陸ハタケ近ハタケ水ハタケ船ハタケ津ハタケよハタケ



アカシシユトの圖

ま今又及石橋下極ま誠教尼開背東西の新き處外邊附ノ隣ニ望華の御
心向ニ而御大社ノ石碑也余級主上リ左ニ火龍主左ニ圓室館作ノ像主
是モ今は益共益の御神湯也其ノて森田安造教め行器ニ醸米飯
坐を廢て持奉る室主土今主坐主事理外故一卷の御文主修羽織の
神主是灣國主を捧^{ハシメテ}ニ一刀を斬リ何等猶恐思ひありは文化度元老
軍亂の附候即リコルトと該物高橋越前守^{カヨシマサシムササギ}在座候の附^{ハシメテ}白馬^{ホウマツ}新十守第役
未^タ頃考^ス曲錄の代^ハ行差主用^ハ不實人^ハ當時繪^ハ失^{ハシメテ}所矣^{ハシメテ}也
感^{ハシメテ}ナシ放拿^{ハシメテ}傍^{ハシメテ}手^{ハシメテ}之^{ハシメテ}病^{ハシメテ}焉^{ハシメテ}也

獨說蝦夷無量利經

五十瀨 多氣志郎奉狂譯

如此我聞一時大君在瑞穗國莊土城命諸有司曰蝦夷

國周田七千五百里皆俱諸島如薩哈連惠吐魯佈哈喃
嚙哩遠久悉里噶噶嚙哩禮文悉里嚙咕嘩等亦皆不減
千數里今茲欲開拓是等國土宜遣大吏鎮之于是諸有
司等實膺其選余亦應募往檢闔境

爾時我起一大願力振廣長舌發大音聲代諸大官吏等
眾說无上甚深微妙最勝精通造化之真理汝等宜諦聽
四大洲中百千萬億一切衆生有智有愚有明有闇有柔
有剛者於其中曰是斯世界衆生者直實淳朴自是義皇
上世之民凡官吏欲開斯土度斯民者無用忘誕無挾偽
詐以真心至情普施慈悲令得潤^{ハシメテ}皇化為第一義

復次實檢其地理宜拓荒耘廢授播穀種菜養蠶之法以備凶荒宜令其種民無餓無凍

復次山岳河海其中所有金銀瑠璃瑪瑙璉磲黑珠琅玕禽獸蟲魚蝦介草樹森羅萬象有性無性恒河沙數百千萬億一切諸物皆宜採之令此世界衆生得圓滿善利大富豐饒

復次所住此國土如奸吏奸商番人等非人者宜急放逐置清潔廉直之大吏及諸有司令正賞罰重典型

復次所在部落宜算計年歲生死繫息善男子善女人令之請習武枝警戒不虞今余所付囑无上甚深微妙最勝

之真理自合天地造化生之道所謂神儒佛三教亦蘊在其中汝等宜信受奉行者即時破天荒講遺利解脫窮乏困厄之苦得即成安樂國土

爾時斯國土一切衆生阿為奴羅女能姑羅世迦智羅迦奈智羅等皆俱發一大音聲歡喜恭敬禮拜乃出真實言其言曰

唵梵音歸命義引夷言廣大義保魯備引夷言廣大義伊邊哆耶引夷言廣大義保魯備引夷言廣大義伊久咤耶引夷言廣大義字嚨無計悉引夷言廣大義唵梵音成悅義引夷言喜娑縛訶引梵音成就義

獨蝦夷無量利經 說

南無地藏菩薩中大神祖靈應護念とまをも猪恭爰拜早と傍の程
たりとまえ我とまあくも深浅もすくみよゆふ人
と徳とてらる源の教導志をかくのタクテラスアケモモモモ
風俗とまよ其は松井の藩士終よ一村ニ村をからむ所なりとムイサリ佐々
は居テヨサツ小卒多ぢラセツコ松原町トヤシリ今其時をチイカリ是日未ミムス
お内度九月トナラねが徳をゆトタシチイ村崎里ちう上マツラ小林もつタルマイ未暮モウ
モはモ腐士の経り はま唐支町人よりせゑく是をも貞人とまて一年の
事奉金行モ種代に貢を體入手を簾の乾蔵把邊落行笠疏被邊地行
桃の家代耕行敷黒大豆耕小豆耕ト熟て主の產物と年中の入用程
収納主是を務めおと寧て役員人主死 まきつ後不至地あひ代行程



と云代料様に放り是を仕切磨古は御子関係と云ふ事なく行便人の所
至りを設度上から行ひを設復順に放り附はば既に之と一すよ易い事に
あてて仕はへ令の法を運送式内徳司大徳職事の法は異あるゆりと頗る
古風ある事りとおもひ

十九日早て馬を出立此地の馬を當を素として之を訓易さ奉る者有
策朴よりとて陰森ある木の弓と矢ひよじゆあらゆ怜と曲馬の馬の
如ナカルユウクシタク也名スカルユウクを手供十人有を一同よみせし金よアセ
ロスカルユウクシタク也名スカルユウクを手供十人有を一同よみせし金よアセ
過てカマバコベサ川人有五羽モンコラシイタクトキコスカ
南星を取れア横星は玉人の革すりと手をもと頗る美味ヤマニシタケたゞ是

と妙く毒ありと云ふ事ある事と云ふ事の望まぬよ詮称えのと毒ありと
放て放余セハツキ幸多幸多よ行の降りとありと有毒草木園地中よ
ぬち自らもは嘗て毒有る事多有る事有る疾窮甚りと毒と心の事と
が生ずはぬと放荒る事シラカビと物すせぬ車石高も又止まテヤレユッ
ル事と多めら是支骨の事大病の彼りりとて慶安之年子免那のみ等之吉津久
留大戰トウゲンとくらりとありてフルケレ左ナイフツ川マス太ウリルメム太ヌツタ太エ
ツコツジト太モ殿守は住せりと云ふ事と被すと樹木も頗る陰寒半ウルウエン故人
あり新イエウクエ六路傍又茅蘿縣鈎子の熟イマツリホロイマツ時モ鹿一足慶と連体
てねう角ホコて木と接觸する慶と対シテはあら渓を隔て豆をもとよ
頗無ありてマツクレリ太ヲロツコチ本人家四影イムツイレヲヤハシレヨとてレニレヤ

ホレトクニ子ベ左魚て此を空兵波アヌコの山ハは烟つ畠の取み放す生
物今芳神の御ノ御火アリトテ今モ紫波ヒ塙ヒヨ土波の火シモ和多くゆもヒモ
色テラフイチヤシ急スシナイト人ホサムシユマヨウツカ、波改ホ中ニ年余有テ故
土歸奥アリトアウカヒ顛コルはあそヒ魚天塙ヒヨコタニコルヒシモ義人アラ
シキヒシ又シリヘツコトソカバト云國名不ミ國名ヒシテソシトテソシトテ
チマカンチニマカ是ヒ同成ヒ石村ヲセハオドロス佐の船トシヘツコトテ
上駄魚ミ杜父魚綱石伏魚ハ闇ヒテ魚解ヒ大同小異の物トロシヒ風
人モアツシと経き川中ニ廣リテ暫時ニ數百
尾有ヒテ水中ニチラカイヒテ取ら鮪魚のやこねら梅モ是夕ホトシヨウ
ヒシモシモ魚でアヒテ呼ヒテ顛ヒ味モアヒテ過てヘウケカマ左シツキ太波ヒ

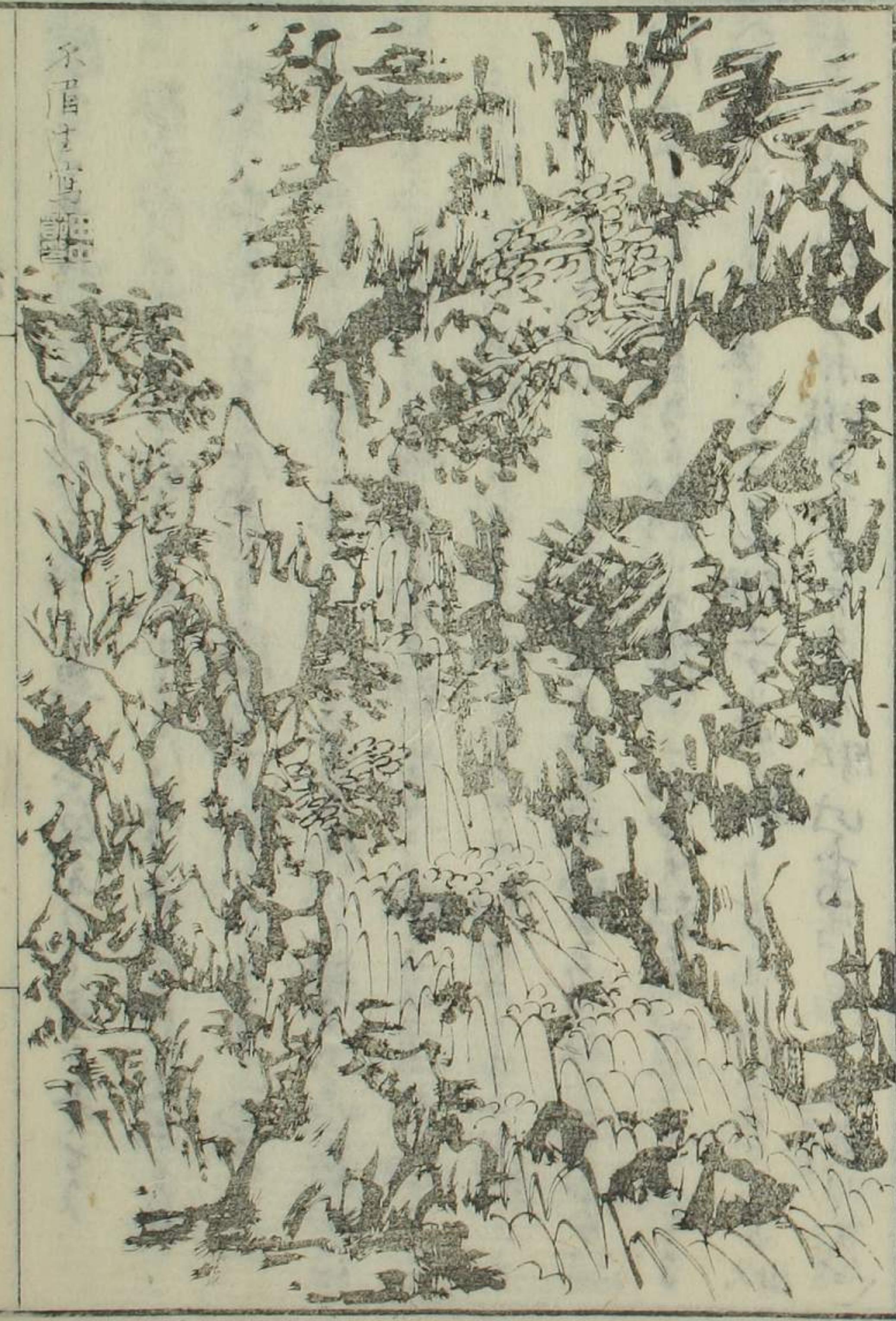
虫の杜父魚を捕るは核は衣高の波
又裾を下す肩を下すて敷襟の雪を
船上舟と車水のまゝ流れ外か却
ヒはあ神のめけ魚を背と身を手覆
あうきまくら骨も小不手捨ひ立て
主捕才母が波川の辯押ヒ因原ヒテ
波を遙き夜令ニモ止追エ捕る事
易シテ舟を寝三度ニそれヒ捕る事
難化アヒテ又ちれア

葉足
團



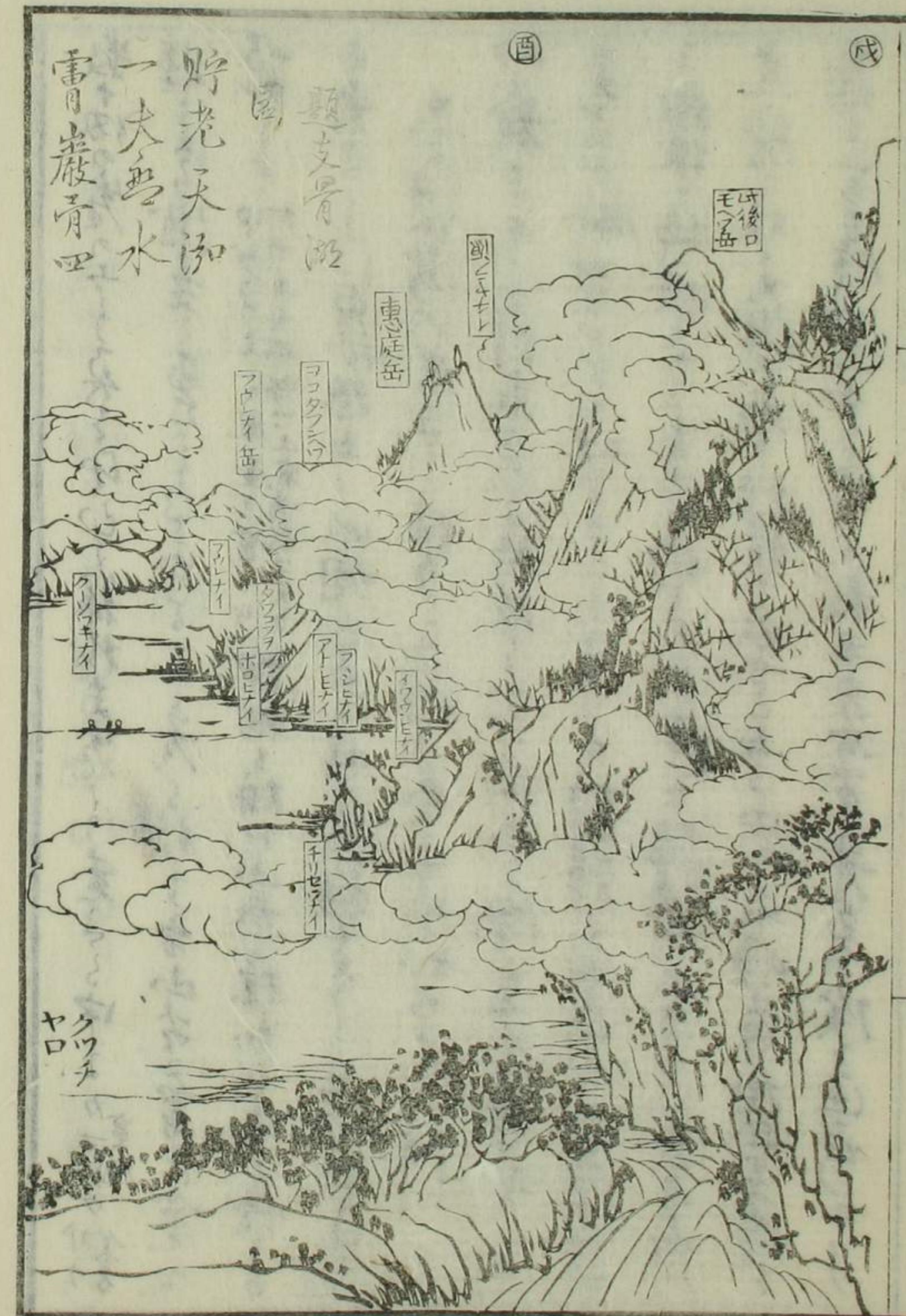
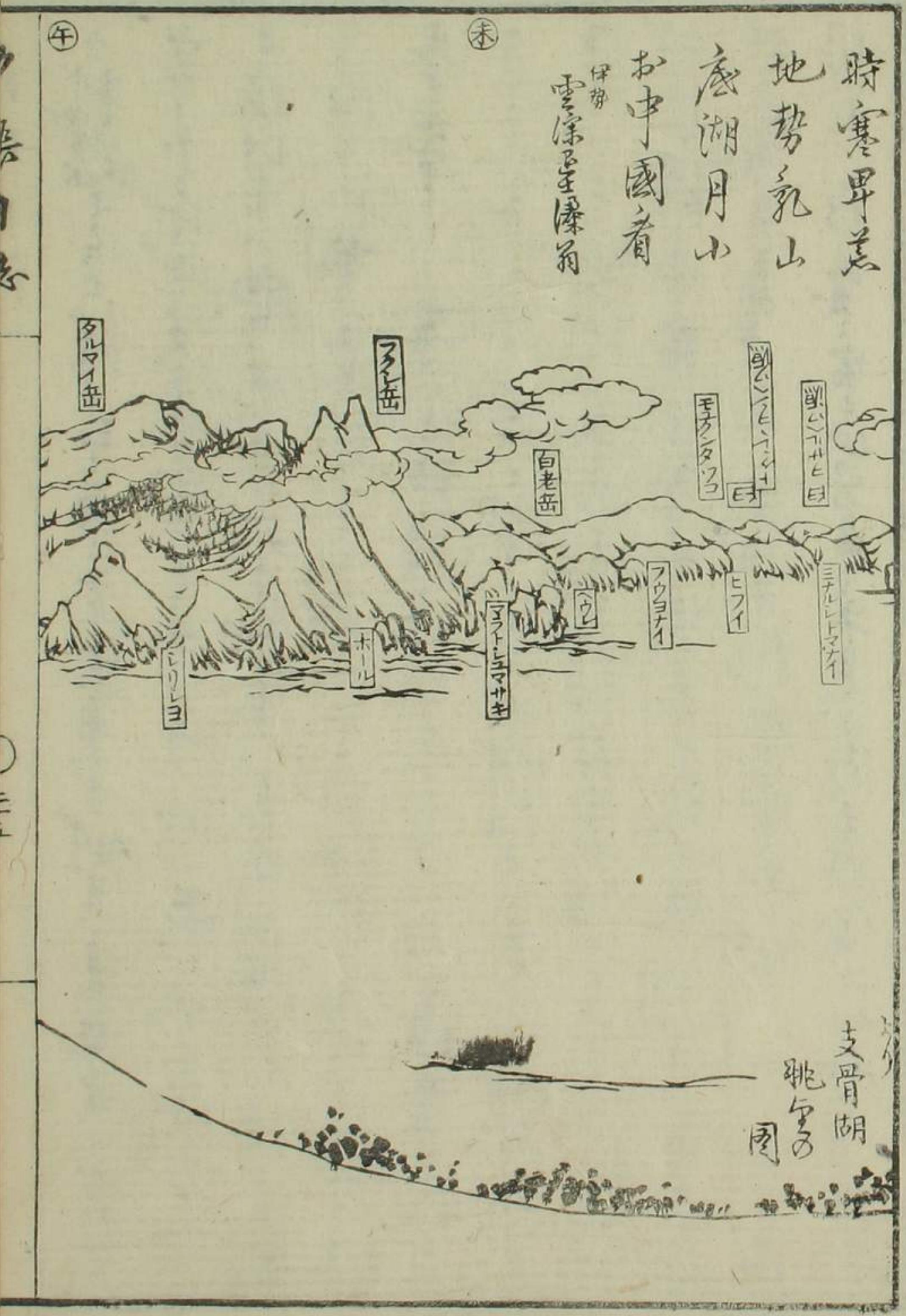
ホヌヲサクマナイ 丹ナセ城と山の腰と峰樹根を虜枝を垂ルホヌサク
モニシテアレキサスホムホ古モ其アモニシ子イレテモニ富モ歴アモニシ様ノレ
ユトモ無リラケラニシトアカニシトそれ申モアカニシトモ承ラ美松モニシセ
ミシテ是先一巻眾の考ニシテシテ御多墨水モ能ラトモ古ミハ猫頭刺
角ヒナリ仍てヒラキモ考テシユトニミ由シユトノ他モ未カタニシテ
カヒラキの後モヒラヒラキの累々ヒラヒラト利モ放ニテ火ノ柳ノ木
シテ人モ折枝モ放ニテ火古モの故ナシムノカシメ松並木ノ耳^{ヒラキノヤヒロホ}
ミシテか成等の時候也連復のや部ナホ松並木ノ耳^{ヒラキノヤヒロホ}
シトモナホ古木モ達モニシテモカシメ

古モ御多墨水モ折小舟ナシ即ち余るナモモベツグト此人アモニシテ上モ



流れておれ 異常處す峰すと想て歎不思ひのやうをあそび
あそびの音未だかきこむせは笑まざりの身そのれをか
異常かはあくゆる處也と原エニワ支骨レコツのあ岳のアラホア
サ日宿意對面嘆水声を聞のと是をもと角松根と撫で上木大雜樹後
森然麻の音を聽てひそ壁のトイチャタマニナルブト太タケチエツホムイハシトナレ
ナリタマヤシノレケベレケタマコロマシユマタマクシレケイタマエカイ子ウシタマニチ
サイソウコタン平タマラヤラシナタマ左字の名あれと山をひ故よアドモダ
ベトク岬タマヒタラ寒タマウコフシ子怪タマユブリポクタマトシリブト太タマフシコニウタマ游
チエゼケイタマヒラボ蟹タマウヘツタアンナタマノ山本異界タマ対タマは

数十仞の崖の上り奥をゆひて綠松高尾タマより走る中タマカマソウタマナ
高タマと云う流壺タマとあわらす出る方タマを放す方タマ山タマを拿タマて竈タマ
鳴タマくタマ甲タマの方言モ龍壺タマ竈タマト云タマ押軸タマも解け山タマも撫かタマつて怪タマ
主雲タマもは角松立タマ水烟タマを晴タマて煙タマ立タマ上タマをも見タマ
主雲タマは角松立タマ水烟タマを晴タマて煙タマ立タマ上タマをも見タマ
口タマ城タマと是タマ防歳タマの上り荆棘タマをかけ倒木タマを擗タマ木タマを落タマて
ウヌンコイタマ游ルツンケイタマ石タマをもて小ラキソウ高玉井中タマを落タマて落タマ木タマをもて
石タマ根タマを落タマ壁タマをり上方タマを仰タマたまふ古口タマウ高玉井二口タマあり是タマ角
井タマの傍タマに大井タマの名タマを轉鏡タマも紫タマと上タマを也タマ又壁タマより樹根タマも角タマと
是タマ井タマ二口タマ落タマるタマあともたた數刃タマの方タマを差タマ爲タマ後タマ道タマ行タマナツリ



ウ中山余
高モハ文
モカセ、津
ヨリ海モ
岩角シ、別
處有其號、實
ニ考之、
寧テトシテ、不
是也。其處
主様は、シテ
小物ナ、是レコツ
治の船子、上
ニ落水漢、と
謂テ、勢ニ
落水漢ト、
トウヤマ、出
ル沼南水、周
口凡五丈、直
峯巒、草木
穿孔を粗て、筏
と仰、是テベツ
ハラ川、度、水
セツナ、小
川、イツウシヒ
ナ、小、上、モベツ
岳、峰、は、チヤニ、岳、頭、を、考、
ミミブジ、ヒナ、小、アト、レヒナ、小、ホロヒナ、小、タツコ、カラ、
星、ヲ、コタヌ、レ、ヘ、小川、中
カ、一、之
此、峰、庭、山、高、嶺、は、百、丈、然、ゆ、了、と、礁、不、能、く、立、キ、幸、せ、
絶、善、勝、肩、を、勝、ま、る、や、肇、嶼、危、仰、於、鹿、屋、高、一、山、下、を、口、入、り、西、
國、朝、被、宣、富、モ、出、の、矢、半、日、人、立、ま、枝、人、高、見、舟、却、馬、考、
引、

葛、喬、矣、人、燒、通、雖、為、共、通、
山、亂、何、う、漢、漢、涼、不、而、亨、
枫、江、如、人、

鷦、鷯、



唐武滄圖
陸興耕山寫

里手までさうの脚又後ろ棹さへやけも魚のさりあひ

一日の風浪と湖を口に難き放々寛く南西の方を眺めて至る
を是より西の方をクウツキラナイ小川を右のラナルツの原より岬を越すミナル
レトマナイ川よりカウレ岳平野を走るナヒライ小川の岬より左をナフヨナイ川
薩摩モユクンタソコフ高白老岳の山の脇を走るナヒライ小川をセマラト
シマサキ岬ロアモホル小川を走る岸ナセシリショ川を走る上よりフクシ岳
元山樹の森のチツフナイト川より上を走る薩摩馬場山の東をヘンケモラ川ハ
シケモラ川にて東の河原からあると水落を有する所を御堂を計ら
ベツチャラヨ鹿車の車輪より出でる所をナヒライサクマナイト川
座舞車車渡の新橋を走りて左へ向かひ左先ラサクマナイト川

廿三日快晴又一時より北折と上り檍歎の歌を聴かずまつて余マツイト川の
谷筋を下り山を越椎名町教會敷園の老木からまかれて五時半の頃
かく生の草を針葉をまく裏を振りよきの甲賀舟波と衣紋ともくよ裂
き殺すもくアッレを破り一ノエウフイトマ川中四五石を山へ越て
ユウフソウゆゑ余を念ね子口より印を重ねたがんと新田は森を水うち中
よ産すと思ふ。又此を城、ホニエウブ川中四管経字はユウフツの源ほヨサクア
玉飯とはかくヲホウムと云はばす是故此玉葉の松を名せば松の
主蘇桂の異名もアリと云ニシタフ源を沼田ヨ安佐をもとすと思ふ
沼澤川の新沼の中水を島田川と云ふ事は人情を以て正つけよ

シ張日詠

あまのれ又て未央の三事うちをかねよますい悪に巴
さす陽川水もあまは長く水をまよひより一馬もひりひと兵と
だまよま取財を零とひまじ難を原すが兵小シラボウ小ヲホウ中端で
水を入ナリと合てぬくら貴きゆとあらけ川邊夕方濱風所
神の御殿は宿一先一回のま處を移一里を宝の椎に門をた
牛も被剥ぎて至物をスサニヤンは結附す

雨をすり水は放く事もあらずすり三塗森の神

廿四史考古新編山房石室修造慶賀年号記承みそに舊
儀は會とし傍山地開之幸と云ふ也

夕張日詠

夕張日詠跋

あらうれはす隣に居るゝ、日のいはまの國とを
あらうてお汝世界のもの跡を十ほきにうへて
えりやの國の川阿竹里をうへて、いはか力の島
をあうて在城了、さきまきには草をすくはま候て
さむかまく川のまきみやかあはまきつゝいはかく角と
やかくまくいはまきつゝいはまきみやかあはま候て

國ありを喜ぶ事もやうふひへ
喜びゆかううるまきゆかれだまく
ゆきあひ是のまきやけやうめく
喜びゆかふゆれ柳の夕張日暮の年暮れ
喜びゆかほめゆれせゆくゆく

喜河喜村

松井西塾主

